２０２２年９月２５日　「他者への奉仕」高橋克樹牧師

聖書　申命記１５章１～１１節、二コリント９章６～１５節

６～７節に「惜しんでわずかしか種をまかない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい」とあります。７節の「不承不承ではなく、強制されてでもなく」ということは、自主的に行うということです。パウロの伝道者としての基本的な生き方の姿勢というものがよくあらわされた表現です。パウロはその前段の６節で「惜しんでわずかしか種をまかない者は、刈り入れもわずかである」と言っています。この言葉は伝道活動のことを言っていると考えがちですが、より広く理解するならば、クリスチャンの生き方とも言えるものです。狭い意味で伝道を理解をすることと理解するのではなく、広い意味で捉えるならば、クリスチャンの対人関係に姿勢だと捉えることができます。

同じような意味でパウロは『わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました』（Ｉコリント９章１９節）と言っています。これらの言葉はクリスチャンの対人関係の姿勢を表現していると考えることができます。すべての人の奴隷という自覚を持った使徒パウロは、さしずめサーバント（しもべ）・リーダーということができるでしょう。サーバント・リーダーというのは、他者への奉仕を通して関係性を築き、そこに生じる信頼に基づいてリーダーシップを発揮する指導者のことです。ときどき牧師ということだけで何か権威が自分に備わっているかのように錯覚する人がいます。しかし、牧師は牧師という職能や権限、権威に基づいて牧会をするのではありません。教会員や求道者との相互の信頼の上に立って、この世の寄留者としての歩みを、教会の人々に同伴しながら関係性を築くのが使命です。ただ、この信頼は一朝一夕には生まれません。傾聴と理解、受容と共感といったカウンセリング的な側面でのアプローチも大切です。しかし、何より大切なことは、牧師の自分自身への気づきです。自分の感情や気持ちの変遷を受けとめる「自己の体験過程のとらえ直し」作業がどうしても不可欠となります。牧師としての経験をたくさん積んでいても自分自身への気づきがなければ自己洞察が生まれてきませんし、この自己洞察が深化していかなければ他者理解が浅いままになってしまいます。自己理解と他者理解は正比例するのです。これは牧師に限ったことではありません。私たち人間は自分の感情や思い、正当性を満たすことばかり考えていると人間理解が浅くなりがちになります。なぜなら、それは気づきなしに自分を自己充足の道具にしているからです。

さらに、牧師は、教会員や求道者、突然の来訪者を問わず、救いを求める人を「神から委託を受けた存在」として受けとめることが求められます。神からの委託ですから、たとえ侮辱され、ののしられても、僕として仕えるようにケアをします。人に仕えることを意味するディアコニアというギリシャ語には奉仕、給仕、仕える、世話、援助などの意味があり、これは牧師職の内容を表す言葉として新約聖書では多用されています。「ディアコニアをする人」を表すディアコノスという語を分解してみると、ディア（～を通して）とコノス（ほこり、塵）で、「塵の中を通っていく」という意味です。この二語の組み合わせが今日の牧師の働きについて強調していることは、神と人に仕える者は自分自身が泥をかぶること、屑や滓のように思われることを、自らの身に引き受けることを覚悟しなければならないということです。現にパウロはⅠコリント4章10～13節で『わたしはキリストのために愚か者になっている。わたしたちは弱（く）侮辱されている。侮辱され…迫害され…ののしられ…今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています』と語っています。

牧師に限らずクリスチャンはキリストのために愚か者となることを自らに引き受けるのです。侮辱されることも厭わず、屑や滓のように扱われることを覚悟しなければなりません。パウロが『ののしられては優しい言葉を返しています』と語っているように、牧師自身にとっては不条理に思えるようなことであってもあえて受けとめる「負の受容力」が大切です。このような話を展開してきたのは、実は私自身への戒めの言葉として、であります。けれども、牧師に限らず、クリスチャンは端的に言うならば、他者に仕えることを通して信頼関係を築いていくことを対人関係に基本にしなければならない存在です。他者への奉仕をすることがクリスチャンの生きる姿勢だと単純に考えるのではなく、その人間関係において自分への気づきがなければ、自己成長もないでしょう。旧統一教会の団体である世界統一家庭連合の3回行われた記者会見を見て、一番思わされるのは、他者に仕える姿勢というものがない点です。確かに信仰において感謝と献身のしるしとして献金をささげることは一般的に行われているものですが、彼らの言うことを見て気づかされることは、すべて自分たちが中心で、他者のためと言いながら、自分中心でしか物事を見ていない点です。世界を自分たちの考える思想で統一するという、非常に自己中心的な姿勢がカルトへと導いていくのでしょう。私たちも、一歩間違えば、自分は他者に奉仕をしている徒いう自己満足の観点から、キリスト教信仰を捉えてしまう恐れがあります。サーバントリーダーとして、他者に仕えながら信頼関係を築いていく姿勢が求められていると思います。